

【2】雨を牢に入れた男

高校の日本史にも登場する白河法皇といえ、平安時代の末期に院政を開始し、天皇をさしおいて権力を振るい、源平に代表される勃興期の武士を操って藤原氏の専横を排除すべく暗躍した日本史上の“怪人”の一人です。

次の話は平家物語にも載っていてご存じの方も多いと思いますが、
“加茂川の水、双六の賽、山法師、是ぞわが心にかなわぬもの”
と白河法皇が嘆かれたというものです。

「加茂川の水」とは現代も京都の市街地を流れている鴨川の洪水氾濫のことであり、「双六の賽」とはサイコロで、「山法師」は比叡山延暦寺の僧兵の俗称で、徒党を組んで山を下って京都の町を暴れまわり、無理難題を吹っかけるのが大きな社会問題になっていました。

権力者の白河法皇をもってしても思うようにならない3つの難題を例示したのでしょうが、はじめと終わりはともかく、真ん中のサイコロというのに意表をつかれます。

この白河法皇にまつわるもう一つの水の話を紹介します。

白河法皇が建立した法勝寺に「金泥一切経」なる有り難い経典を奉納し、その供養の儀式を盛大に行おうとしたところ、雨となり延期しました。しかし3回延期してもその度ごとに雨が降るので4回目に式典を強行したところ、やはり雨に降られ散々な目に遭わされました。

法王は怒り心頭に発し、雨を容器に入れてそれを獄舎に幽閉してウップンを晴らしたのです。

こんなに雨が降ったのだから、6～7月の梅雨の頃のことでしょうが、古代なら天の神をなだめるために人身御供で2～3人殺されても不思議はない場面です。誰のせいにもせず、雨水を擬人化して牢に放り込むという法皇の発想のユニークさにそして何処かユーモラスな感じに、雨に悩まされる現代の私たちもニヤリとさせられます。